坂出祥伸著
中國近代の思想と科學

野村浩一

一

中國近代の思想について、私たちはこれまで、戰前・戰中の業績をも前提としつつ、ある程度の蓄積を共有するに至っている。

かりに學說史ふうに、かつきわめて大まかに言うならば、戰後、私たちは、中華人民共和國の成立という歷史的現實の中で、ほぼ十九世紀半ば以降の中國における諸思想の展開を跡づけ、同時にその變動の筋道を讀みとろうとしてきたということができよう。その場合、基本的な柱となるのは、やはり「傳統と變革」という大きな枠組みであり、そしてまたその變革のための重要な契機となった西洋諸思想の流入ないしそれとの對決といった視點だったと表現できようか。これまで「二十年餘り」「中國近代の諸思想」の究明（「まえがき」）に取組んでこられた著者もまた、大きくはこのような流れの中にあったとみられよう。ここに取上げる本書は、まさにそうした著者の二十餘年の成果の集成に他ならない。

では、本書は、わが國の中國近代思想研究の中で、どのような意味をもち、またどのような位置を占めるのであろうか。あるいはまた、それはどのような地點から出發し、さらには、どのような展望を示そうとするのであろうか。

本書は六百頁近い大著であり、內容もまた清朝中期から二十世紀初頭まで、樣々の思想家及び諸思潮を扱って、きわめて多岐にわたる。それゆえに、私は先ず個々の論文の紹介に先立って、本書の特徵と思われる點をいくつかあげることから始めてみよう。それはまた、本書のもつ性格なり意義なりを最初に提示するという意味をもつことになるだろう。

先ず第一に、對象に向う著者の手法あるいは態度が、きわめて綿密であり、かつ實證的であることを指摘しておきたい。なるほど、およそ歷史學において、史實の實證はそもそもの出發點であり、また一切の史的究明を成立させる基本的な土臺であるにはちがいない。しかし、中國近代の諸思想を扱うに當っては、現實には、やはり特殊の困難がつきまとっているといっていいだろう。それは、一つには、この激動の時代を對象とするに際して、「傳統學術」及び「流入した西洋諸思想」の兩面に關する確實な知識が要求されるからであり、そしていま一つには、「思想」の究明ということ自體が、たとえばある思想家の「書かれた言葉」の確認と同時に、その解釋及び意味づけという、一種の讀解作業を本來的に內包しているからである。

長い歷史をもつ中國の傳統學術ないし傳統思想については、そのベーシックな側面での理解すら仲々容易ではない。そして他方また、私たちは、傳統思想と外來の西洋思想との間に散らされる火花にともすれば目を奪われて、思想全體の重みや深みよりは、そこに發する光そのものに過大な比重をかけがちである。こうした點についていえば、本書全體を通じて、著者の方法はきわめて堅實といってよいだろう。少くともそこには、實證性を缺いた飛躍はほとんど

見受けられない。思想史の研究がややもすると、ただ表現のみに依據して多少とも恣意的な解釋、結論に流れる場合があるのに對して、本書はそうした弊を免れている點に一つの重要な特質をもっているように私には思われる。とはいえむろん、思想史研究が、明示的であれ、默示的であれ、やはりそこに展開される諸思想について、その獨自の思想世界の確定へと向うという側面をもつ以上、著者が提示する諸思想の解釋についてもまた、問われなければなるまい。ともあれ、私は、これまでの諸研究の中に本書をおいてみる時、さし當り私自身が感得する、著者のこのような、いわば對象への〝タッチ〟の在り方を一つの貴重な特質として指摘しておきたいと思う。

第二に、內容に卽していえば、本書の重要な意義の一つは、著者がこれまで多くの精力を傾注してきた康有爲についての諸論文が、ここにまとめて收錄されたという點にあるだろう。清末の思想界において餘りにも著名なこの人物については、すでに取上げられることはきわめて多く、また特定の視角からする追求も少なくはないが、その思想の發展に卽して、綿密に考察したものとしては、わが國では、おそらく著者の數年來の諸論稿をあげなければならないであろう。むろん中國・臺灣では、康有爲に關する專著もあり、またアメリカでは蕭公權氏の大著が一九七五年に出版されている（Kung-chuan Hsiao, *A Modern China and a New World Kang Yu-wei, Reformer and Utopian, 1858—1927*. University of Washington Press.）。著者はそうした成果をも參考にしつつ、このきわめて問題史的な思想家に對して基礎的な地點からせまろうとしてきたわけである。全體のほぼ四分の一を占めるこの部分を、本書の大きいメリットの一つと考えることは、決して不當ではあるまい。

第三に、私たちは、本書が清末における近代科學の受容について、多くの新たな知見を提供していることを取上げておくべきであろう。十九世紀半ば以降の西洋文化の流入に關しては、これまでもっぱら政治、社會思想の側面に關心が集中され、近代科學の受容については、ほとんど見るべき業績はなかったといっていい。著者は、科學史研究グループ（京大人文研、科學史研究班）への參加を契機として、この分野での一連の考察をつみ上げ、それがまた本書の基本的な一部を構成している。こうして、本書は『近代中國の思想と科學』という鮮明かつユニークなタイトルをもつことになるわけである。

二

本書に收められる論文は、合せて二六篇、四章構成をとり、各章はそれぞれ次のように題されている。すなわち、「第一章　前近代の思想家たち」「第二章　變法運動の思想」「第三章　辛亥革命前後の思想」「第四章　近代科學の受容と科學啓蒙運動」。一見して明らかなように、全體としては、著者がこれまで幅廣い考察を試みてきた諸論稿がほぼ時代順に配列されている。以下、內容について要約を試みよう。

(1) 第一章で扱われるのは、清朝の中期から末期にかけて、學術、思想上に足跡を殘した五人の人物、戴震・焦循・魏源・龔自珍・朱次琦の思想である。この中で「戴震の思想」及び「龔自珍の經濟思想」は、それぞれその〝思想內容〟及びその〝思想評價に關する論爭〟についての、いわば紹介的な論文であり、また「魏源の

社會觀」は、著者の最も初期の仕事に屬するせいか、多少とも公式主義的な解釋が目立ち、かつ他のすべてに比して分析方法の差が顯著である。いづれにせよ、本章はこの時代の思想について、必ずしも系統的な考察を提供しようとするものではない。したがって、ここでは紙數の制約をも考慮して、焦循・朱次琦を扱った論文をごく簡潔に紹介しておくことにしよう。

「焦循の學問」「焦循の『論語通釋』」は、乾隆から嘉慶に生き「通儒」と稱されたこの學者についての專論である。著者が焦循をとりわけ問題とする理由はそれほど明らかではないが、その關心の焦點は、彼の「治學の方法」にあるようである。焦循は「己れの思索力を盡くすこと」を治學の要諦としたうえで、廣く經學・史學、天文曆算に通じたが、考據學全盛の時代にあって、なおかつ當時の學者がみだりに考據の名を立て、一說に固執して他說を排し、しかも漢儒の說を絕對視するという態度をきびしく批判した。その根柢にある態度は、一言で「一貫」あるいは「貫通」という言葉に要約できる。そうした立場のまえでは、漢學・宋學の區別は門戶の見として斥けられるばかりではなく、さらにいたずらに「異端」を排斥する態度もまた、かえって「執一」として非難されねばならないだろう。こうして、著者は、このような焦循の治學の方法の中に、いわば思想的土壤の變化をかぎとり、大きい留保つきながらも、長く「道統觀念の桎梏に束縛されてきた學術の歷史は」、この時代に至って「ようやく一種の思想解放を現象したといえるであろうか」と結論づけている。

他方、「朱次琦の學問」は——現在ではむしろ康有爲の師として著名なこの人物について、殘された數少ない資料をもとに、その學問の概略を復元しようと試みたものである。著者によれば、その學術は「漢宋兼采」と稱せられたものの、鄭玄・朱子をともにすてて孔子に復することを目的とするものであり、かつ何よりも實踐躬行を重んじ「經世救民を歸とする學問を門人に說いて倦むことを知らなかった」とされる。この論文は、朱次琦についての整った紹介という點で大きい意味をもつと思われるが、しかし他方、著者にとって、これはむろん康有爲研究の中で、明らかにその延長線上にあったにちがいない。ともあれ、康有爲の師についてのこの論文を第一章の末尾におくことによって、引きつづき「變法運動の思想」が論ぜられることになる。

(2) 第二章に收められるのは、もっぱらこの運動の指導者、康有爲の思想に關する六つの論文、すなわち「康有爲の生涯」「康有爲初期の思想——『康子內外篇』の考察——」「『長興學記』『桂學答問』について」「『新學僞經考』について」「大同思想の成立と『大同書』」、そして「譚嗣同の『以太說』」である。

清末思想研究の中で、康有爲は、そのユニークな思想、またみかたによっては甚だ廣汎な射程をもつ思想の在り方によって、これまで最もしばしば取上げられてきた人物の一人といってよいだろう。しかし、その思想形成の過程に關しては、從來、多くの研究者によって論ぜられてきたいくつかの問題が存在していた。それは、彼の思想の凝縮點ともいえる大同思想が、基本的にはいつ成立したか、そしてまた公羊學三世の說に依據する彼の進化史觀の形成に對して、當時、紹介されつつあった西洋の進化論は、どのような形で影響を及ぼしたかという問題である。他方、研究史的にいうと、近年、スタンフォード大學、フーヴァー研究所所藏の「康有爲遺稿」

（マイクロフィルム）を活字にした『蔣貴麟萬木草堂遺稿外編』上下が刊行され（臺灣、成文出版社、一九七八）、そこには『康子內外篇』を主とする彼の初期の文章が收錄、公表された。康有爲の思想形成については新たな檢討の必要性が生まれたといっていい。第二章に收められた六篇の論文は、すべてこのような基本的な課題に對して、著者が多面的に考察した成果を示すものとなっている。

著者の分析は、個々の著述の內容に卽して詳細、綿密であるが、私はここでは、從來の諸說をも念頭におきつつ次の三つの論點を紹介してみよう。

先ず第一に、著者は『大同書』の一應の完成を戊戌政變後、亡命の地インドにおいて、すなわち光緒二十八年（一九〇二）としつつも、その執筆は光緒二十年頃から始まり、二十三年ごろには內容的には成熟した形ができあがっていたと考える。これまで、著述時期については一九〇一—〇二年という說が多く、しかもその場合、康有爲自らが大同思想の構想をはるか以前にさかのぼらせるのは（『自編年譜』）、むしろ捏造であるというニュアンスで語られていたのに對し、著者は、先ず執筆時期を數年ひきあげるわけである。さらに著者は、先述の『康子內外篇』の考察を通じて、初期康有爲の思想の中に、後年の大同世界の理想像を形成する諸要素が——なお體系的、論理的とは到底言えないが——かなりの程度、出揃っていると考える。こうした成書時期の檢討は、多少、些末な問題ともみえるかも知れない。だが、視點をかえれば、これはやはり重要な意義をもつ問題というべきであろう。なぜなら、大同世界の構想がきわめて早い時期に始まるということは、この思想が、むろん外からの幾多のインパクトを受けつつも、やはり傳統學術を讀み拔き、讀み破ったうえに成立した、きわめて自生的なものであること、したがってまた、長きにわたる王朝體制の掉尾を占めるにふさわしい位置を占めることを、あらためて確證するからである。それは、單に康有爲の思想のもつ意義にかかわるばかりではなく、さらには中國思想に內在するある種の擴がりと深みをも示唆することになるだろう。

ところで、外來思想のインパクトについていえば、最も重要な論點は、むろん先述したように、清末における進化論受容の問題であるにちがいない。この課題に關しては、著者は一つの明快な解答を提出している。從來、康有爲の進化史觀の形成については、嚴復『天演論』との遭遇（一八九五）を決定的とする解釋が一つの立場を占めていた。これに對して、著者は、伊藤秀一氏の業績を參照しつつも、さらに新たに「康子內外篇」の分析を通じて、すでに光緒八年頃（一八八二）から翻譯西書を通じてそれに接する機會があり、また次いで日本書をも源泉としてその知識を得ていたとする。ここで、その內容を形成するのは、何よりも地質學、天文學における進化論であり、また生物進化論である。たしかに彼の進步史觀は、「中國の傳統的な思考から直接に導かれたものではない」。しかし、その進化の觀念が、進化と倫理を說いたハックスレーの嚴復譯『天演論』よりは、むしろ宇宙の進化を論じた地質學的な進化論の中に先ずは醱酵していると推測されることは、きわめて興味深い。そして、それはまた、康有爲思想の解釋において、一つの重要な鍵を提示するものであるように、私には思われる。

第三に、私はここで、『廣藝舟雙楫』についての著者の考察をあげておきたい。この書物は「清朝碑學派の掉尾を飾るにふさわしい

書論」とされ、その内容は「當時までに出土した碑刻すべてを網羅して系統的に整理したもの」であるが、その内容が書論としての特殊性を帯びていることもあって、その分野からする論及はともかく、これを康有爲思想全體の中で位置づけるという作業は、管見の限り、ほとんどなかったように思われる。著者は、この著述の特質を追いながら、同時に、康有爲の書學研究がのちの『新學僞經考』の最も重要な問題である古文僞作説にとっての基礎的作業の一部分をなしていたのではないかと推測する。つまり彼は、この時期、金石碑文を素材とする文字學研究を行なうに際して、「文字流變説」すなわち〝文字はすべて繁から簡へと變化する〟という考え方をとり、こうして、のちの『新學僞經考』において最も重要なポイントの一つとなる、いわゆる「古文」に關し、これは「春秋戰國の遺物である鐘鼎に刻された文字に基いて、隷書に似てはいるが詭形奇製な書體をつくり出した劉歆による僞造だ」とする主張を抱くに至るわけである。康有爲のこうした議論は、むろんこんにちからみれば改めなければならない點が多く、その文字流變説も決して正しいとはいえない。しかし、こうした研究が少くとも『新學僞經考』という破天荒な著述の基礎に存在していたという推測は、きわめて説得的である。

著者は、本章の第三論文において『桂學答問』著作時期の康有爲の思想を扱い、彼が公羊傳獨尊に向う過程を辿りつつ、次のように述べている。すなわち「このような過程は、裏返していうと、眞の孔子の道の發現を阻んだものを認識する過程であり、その最初は朱次琦に孔子の道に直接に復歸することを教えられ、ついでその妨害者としてまず劉歆がその僞作の故に非難され、暴露されたのであり、荀子と朱子とが、前者は春秋を繼承せずして「小康の統」をついだがために、後者は修己の學をいうだけで救世の學を明らかにしなかったがために否認されるのである。荀子・朱子の否定は、逆に孟子の積極的評價でもある。「不忍人の仁」「不忍人の政」が孔子改制の實質的内容とされるのは、『禮運』の大同小康思想への接近の端緒となる。はたして『春秋董氏學』で早くも、大同小康と三世進化説との融合の雛型を見ることができる。これが更に成熟したところに、『大同書』にみられる廣大無邊なユートピア的大同世界の構想となるのである。」

おそらくこれは、康有爲の思想形成過程についての一つの側面からするきわめて適確な要約といってよいだろう。『自編年譜』を含めて前後撞着の記述の多い、彼の思想形成過程の復元、整理に、著者はよく成功している。そこでとられる方法は、どこまでもテキストに卽しつつ、内在的に理解、整理していくというアプローチである。そして、ここに示される康有爲思想の在り方は、彼の思想そのものの意義及び位置づけを、より廣い視野の中で檢證するための重要な礎石を提供するものというべきだろう。

(3) 「第三章」において、量的にも多くを占め、かつ突込んだ考察がなされているのは、「梁啓超の政治思想——日本亡命から革命派との論戰まで——」と題された論文であり、ここには、他に五つの論文、すなわち「康有爲暗殺事件をめぐって——中西重太郎の書簡の解説——」「康有爲の須磨客寓時代」「辛亥革命期におけるアジア連帶の思想——章炳麟・劉師培を中心として——」「魯迅と越社——辛亥革命期の魯迅の一側面——」「胡適の思想」が並ぶ。これらの

諸論文がおおむねかなり限られたテーマについての專論であるのに對し、前掲「梁啓超」論文は、全體として、前章につづく骨太な勞作と評價できよう。したがってここでは主としてこの論文についての論點を紹介してみよう。

梁啓超についてもまた、康有爲と並んでその考察は數多い。しかし、著者は、從來の研究にあきたらぬ諸點をあげ、彼の深刻な對外的危機認識を追求したうえで、つまる所、梁啓超がこの危機に對して、どのような方策をもって立ち向おうとしたか、そしてその思想は、どのような構造をもっていたかを問おうとする。思い切って要約すれば、その斬新な主張、新しい學說の精力的な紹介にもかかわらず、著者によれば、梁啓超の思想は、その根柢において「舊道德」を溫存させており、時に應じて、その主張の前進、「後退」はあったにせよ、そこには舊中國の思想的構造が濃厚に存在していたとするのである。辛亥革命前についてみれば、この問題は、一九〇三・四年を境とする、有名な梁啓超の主張の變化、すなわちルソー主義からブルンチュリー學說への轉換において、最も明白にあらわれよう。彼が一九〇〇年代初めの一時期、「新民說」において、自由・平等を論じ、權利を聲高に主張した時、それはともかくも彼がこの思想を明確に受け入れていたことを示すものであったのだろうか。この點についての著者の考察は、變法運動期、社會進化論の受容の特質にもさかのぼって詳細である。結論的にいえば、梁啓超が一時期、「公德」の內容として高唱した諸德目、すなわち權利觀念、自由、自治、進步、自尊などは「長い間、家や宗族の枠の中に閉じこめられていた人間を解放し、かれらを個々の人間として把握することによって、國家との間に權利義務の法的諸關係をとり結ぼうとする」ものであり、「中國二千年來の歷史における人間觀としては、最も衝擊的な解毒劑であった」。しかし、本來そのような人間觀は、「儒敎的家族倫理を否定したところに成立すべきであるにもかかわらず、彼の場合、後者が隱蔽され包攝されたままで、近代的自我の確立が求められていたのである」。彼の人間像の中では、個人は家から解き放たれはするけれども、「同時に、今度は、學校・公司・鄉市・府州縣といった團體の中の個人として再び把握される」。「利己心は、擴大されて利他愛から國家愛へと何の矛盾もなく連續的に整合的に擴大され、常に調和するはずのものであった」。こうして「彼の意識にあっては、儒敎的家族倫理は、決して『公德』的な個我の確立にとって障害物とはならなかったのである」。

私事にわたるけれども、この問題について、評者がかつて梁啓超の立場の「轉換」と表現したことに對し、本書の中でそれは「後退」ではあるが「轉換」ではなかったと批判をうけている。この點については、私は、著者の指摘を受け入れたいと思う。綜じて、私はかつて梁啓超の變化に關し、何よりもその政論家としてのレベルにおいて、より多く立論していたからである。ともあれ、梁啓超の思想についての、このような分析は、多くの課題を示唆するものといえよう。というのは、その人間觀あるいは社會と人間の關係の把握を通じて、著者は、ただに梁啓超のみならず、より基本的な中國近代の思想の構圖の一面を提示しているからである。

(4) 最後に第四章は、いずれも近代科學の受容に關する、きわめて基礎的な研究である。ここには、「近代的科學用語の形成と定着」「清末における科學敎育——上海・格致書院の場合——」「清末の科

學者・徐壽について」「清末民國初化學史の一側面――元素漢譯名の定着過程――」「『西學書目表』と『東西學書錄』」「清末における西歐論理學の受容について」「中國科學社の成立について」の七篇が收められる。

本章は、全體として、アヘン戰爭以後の科學史を三期にわけたうえで、第二期まで（―一九四九）を樣々の側面から考察するが、對象の性質からしても、あくまでもモノに卽した追求が試みられ、それがまた、本章の著しい特色をなしている。これら諸論文の執筆は主として昭和四〇年代に始まり、ごく最近に及んでいるが、おそらくこうした分野での研究は、著者の視野と方法をより豐かにしたとみてよいだろう。特に「元素漢譯名の定着過程」の考察、「上海・格致書院」についての論稿は、およそ近代科學の受容にどれほど地みちな努力が要求されたか、それがどのような人々によって擔われたかを、いわば同樣の丹念な追求によって明らかにしてくれている。「格致書院」については、ビガーシュタッフ、ベネットの研究に多くを依據するとはいえ、これまで中國でもほとんどふれられなかった問題であり、その意義は大きい。そして、著者はまた、最近の中國におけるジョン・フライヤーに關する記述の一つにも言及し、〝西洋宣敎師たちが、ただ宗敎宣傳のためにのみ自然科學紹介を行なった〟という「極端に一面的で且つ事實にもとる評價」をいましめている。

なお本章の中で「清末における西歐論理學の受容」は、嚴復、梁啓超、そして梁と革命派との論戰などを扱いつつ、その受容が現實の政治的社會的思想的諸狀況の中で、きわめて「實踐性」を帶びたものとして展開されたことを指摘して、興味深い。おそらくこうした形での捉え方は、それをより深く展開する時、清末思想の研究を新しい文脈の中で讀みなおすための一つの契機となるように、私には思われる。

三

ほぼ二十年閒にわたる諸論文の閒には、その方法、濃淡において差があり、また相互閒に多少の重複がないわけではない。しかし、全體として、本書はやはりその年月にふさわしい重量感をもつといってよいだろう。そうした事實を前提にしたうえで、最後に若干の感想をつけ加えよう。

はじめに、私は、近代中國思想研究史上の流れに言及して、「傳統と變革」という大きい枠組みについてふれた。この枠組みとは、言葉をかえていえば、より廣く、歷史における繼承と斷絕、あるいは連續と非連續という基本的な課題へとつらなるものでもあったろう。いま、本書全體をあらためてふり返ってみる時、この書物はこうした課題について、どのようにかかわっているのだろうか。

著者は、それぞれの論文において、その筆致は愼重であり、その結論は控えめである。ただ、その「まえがき」において、著者は、なお未解答の、しかし年來の疑問と斷りつつ、次のような二つの問題を提示している。少しく引用してみよう。

「第一の問題は、個人が宗族・家族・村落等々の血緣的・地緣的な軛を斷ち切って、自主的自律的存在としての權利を確認するような思想が、西歐近代思想に接した後にあっても、ついに提出されることがなかった。中國は、人閒の權利が個人として確立されないまに、社會主義という、いわば全體優先の社會を選擇したのであ

る。……

第二の問題は、中國が西歐近代科學を受容した後においても、中國の思想家たちは、自らの近代的自然觀――ひいては、近代的社會觀を――構築しえないままに今日に至っているということである。……道と器、體と用、といった思考の枠組みの中で、つまり器や用の面において西歐近代を受容しようとする態度は、今日においても變っていないように思われる」。

おそらくこれは、研究の當初から著者の中に潜在し、かつ次第に明確な形をとって顯在化してきた問題であるにちがいない。そして、それはまた、ただに近代中國のみならず、よりさかのぼって、およそ中國思想なるものの根柢に横たわる基本的な課題の一つでもあるだろう。

たぶん私たちは、著者のいうように「個人の自主的自律的存在としての權利を確認するような思想がついに提出されることがなかった」という命題を、承認しなければならないかも知れない。それは、他ならぬ著者の扱った限りでの思想史的事實が證明しているところともいっていい。だが、思うに、そのことが意味するものは、やはり決して單純ではないだろう。それは、中國思想の在り方の一つを指示するものではあっても、むろん他の解讀を排除するものではあるまい。もし方法的にいうならば、私たちは、さらに多くの視角からするアプローチを今後も積み重ねていく必要があるように思われる。

たとえば、著者の指摘の背後に存在すると想定される個人と全體という大きい圖式の他に、かりに個體―集體―全體という三項對立の圖式による讀解を導入すれば、そこには、どのような構造と世界が出現することになるのだろうか。康有爲について、梁啓超について、また胡適や中國科學社の思想について、それらを讀みとるための、なお未知なる鍵は存在していないのだろうか。そして、それらを摸索するためには、私たちは、いっそう廣い比較の廣野へとつれ出されるのではあるまいか。これは、私たちのそれぞれの價値判斷とは別の次元において、なお私たちの前に置かれている一つの重要な課題であるように私には思われる。

著者が、今後、古代へ、そして道教へと關心を移されるにせよ（「あとがき」）、あるいは近代中國の思想に、いっそうの焦點を合されるにせよ、著者のこの二つの問題が、より廣い視野の中で檢證され、成果を生むことを期待したい。

一九八三年三月　京都　同朋舍
A五版　五八六頁　一五〇〇〇圓

池田誠・田尻利・山本恒人・西村成雄・奥村哲著
中國工業化の歴史

中國勞働運動史研究會

近代の中國經濟に關する通史的書物は、これまで皆無であった。日本のみならず中國においてもほぼそうであったといってよい。「中國近代經濟史」との表題を冠した既刊書は、すべて一九四九年もしくはそれ以前の時期（＝中華人民共和國成立以前）において、